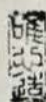


浄土

1976-8

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別郵便承認誌)第三二五号
昭和五十一年七月二十五日印刷
昭和五十一年八月一日発行
第四十二卷 第八号





担 護
を 盡

北村謙順



攝護無倦

北村謙順

(神奈川県南足柄市)

西念寺住職

「攝護倦むこと無し」。三祖様の伝通記のお言葉です。攝取不捨のお心を示されたものであります。無間重罪の身をも見すてたまわず、極悪最下のために極善最上の法を説かれたのが、弥陀・釈迦二尊の本意であります。かの韋提希は殺父の息子を惡子とて見すてんとしました。無理からぬことですけれども、仏は之を攝取して捨てたまわなかったのです。これが無縁の大悲であります。善導様が慈心相向弘眼相看の生活を繰り返し説かれた奥底には、無間墮獄、出離無縁の身にもなお見捨てたまわぬ仏の広大な慈心に感泣されたればこそであります。私もまた宗祖先徳のお蔭により攝護無倦の身であったことを唯々ありがたく感ずるのみであります。

八月号

目次

人間万事塞翁が馬……………	牧田諦亮…(2)
△お盆によせて▽北辺のお盆……………	須藤隆仙…(6)
現代とこころのシリーズ⑦	

児童文学における子供たちの心……………	高橋良和…(10)
哲学への道……………	戸川靈俊…(14)

南国旅情(四)……………	宮林昭彦…(19)
--------------	-----------

浄土教の流れ△△泣くから悲しい……………	竹中信常…(24)
----------------------	-----------

△読者の声▽念仏の自力と他力について……………	谷村義三…(29)
-------------------------	-----------

法数術語十二カ月(八月の巻)……………	宝田正道…(32)
---------------------	-----------

念仏ひじり三國志(二十八)法然をめぐる人々……………	寺内大吉…(36)
----------------------------	-----------

表紙 久住 静雄画

カット 大正大学美術部





＝人間万事塞翁が馬＝

まき た たい りょう
牧 田 諦 亮
(岐阜教育大学教授・文博)

夏にしては膚^{はだ}さむい七月四日、私は沼津の乗運寺林彦明上人の墓前に詣でてのち、御殿場の富士霊園にある王長春先生一家のお墓におまいりした。林彦明上人はかつて百万遍知恩寺の御法主であり、私は上人のお伴をして昭和十年六月、日華仏教研究会の第一回中国仏教視察団の末席を汚して、夏の二カ月の訪中旅行の機会を与えられた深い因縁がある。また王長春先生はこの旅行を通じて、その後、今日にいたる四十余年の王一家との交友を続ける発端となった人で、当時は呉鉄城市長のもとにあ

って専門員として、対日交渉の事務を担当した人であり、後には市政府公用局長、首席参議の要職を歴任された。戦後、王長春氏は北京に隠棲していたが、旧知の辻政

信氏がタイ国のバンコックからひそかに僧形に身をくら

まして、陸路を重慶から南京への都入りとともに、王氏も南京に来て、再会を喜んだのである。まもなく共産軍の南下とともに台北への逃避行となったが、この旅費を辻氏が金策したことは、『潜行三千里』に記すとおりである。王長春氏はこの後、不慮の交通事故で負傷、昭和二十八年六月二十九日、余病を併発して逝去された。

長男の知成君と私は、昭和十一年三月、京都大学の入試に、ともに京都寺町乗願寺から出かけた仲である。医学部で整形外科を専攻した彼は、大学院で研鑽をかさね、医学博士の学位を得、また良縁を得てめでたく結婚して、まさに前途洋々の人生が展開するかのようであった。その頃、私は上海の東亜同文書院大学の助手として、中国近世の宗教史研究に専念していたが、まもなく

学徒応召の第一陣として、昭和十八年九月、現地部隊に入隊して、浙江省嘉善県に駐屯することとなった。

このような混乱は、終戦によって最高潮となった。ま

ず、王長春先生は上述のようにひとまず北京に隠棲された。知成君夫妻は国民政府から中共政府への大転換の中に、北京の病院に勤務していた。科学者としての特殊技能は高く評価され、生活条件も必ずしも不遇ではなかったが、結局は、親日派の父、日本留学生出身の自身という、新社会に適合した経歴ではなかった。奥さんとお嬢さんをのこして、不遇のうちに一九六九（昭和四十四）年十二月二十一日、この世を去った。諸般の事情から奥さんは郷里の京都に引き揚げざるを得なかった。

和成君の弟勝之君も、彼の子供の頃からの生いたちを私はよく知っている。長じて秋田鉱山専門学校から京大工学部に学んだ彼も、その特技を活かすことはできず、北京に帰ることもできず、今は東京で中華料理北海道を経営し、奥さんが漢方薬などをも扱う薬局をひらいており、一人息子との三人で楽しい家庭をきづいている。

王家には、なお二人の姉妹があった。姉は両親が日本在住中に、早く関東大震災で行方不明となって今日にい

たっているし、妹は天津の医学校を卒業して、北京で病院に勤務しているが、今日のような状況では、いわば音信不通のようなものである。

昭和二十年八月十五日、敗戦にともなう現地召集解除後の半年を、上海の集中營で、私は、小竹文夫、武田泰淳氏らと『史記』の列伝を読んだり、『二十二史劄記』の講義をしてもらったりの生活を送ったことは、今もなお苦しい中にも楽しい憶い出となるものであった。しかしまもなく、占領軍命令で東亜同文書院大学は解散され、王長春先生の見送りをうけて日本に帰っても、なお数年は研究に専念することは不可能であり、ようやく昭和二十五年の末に京都大学にポストを得ることとなった。それからもはや二十七年の歳月が経過したのである。

王長春先生の最も好まれた言葉の中に、「人間万事塞翁馬」というのがある。王先生を訪ずれる人々の希望にこたえて横額や色紙にも、好んでこの七文字を書かれた。これは王先生の乱世に処する人生訓でもあった。その昔、塞のそばに住む翁がいた。彼は名馬を持っていた、いつも他の人にこれを誇っていた。たまたまこの名馬が石に躓いて足を折り、使いものにならず、止むなく

斃すこととなり、翁は大いに慨き悲んだ。ところがまもなく戦争がおこり、領主は馬を有する壮丁を招募したのである。このために名馬をうしなつた翁の長男は、かえつて兵隊にとられることを免れて、命をまっとうしたのである。人間一生のうちに幾度もおとずれてくるこのようなできごとに、一々眼を奪われ、心を惑わすようなことがあつてはならない、達観せよ、との教訓を示すものである。そこには単なるあきらめのような消極的なものでなく、仏教にも深い関心を持つておられた王長春先生の、体験から出てきた尊い人生観を知ることができる。

台湾で亡くなつてから十数年の間、辻政信氏からとわたされた王先生の御遺骨を、滋賀県の自坊（念仏寺）で奉安していたが、王勝之氏夫妻の努力で、この富士霊園にお墓が建立され、有縁の者数十人が参集して納骨慰霊の法要がいとなまれたのは、昭和四十六年六月二十九日であつた。ついで四十八年六月には、王長春先生の二十周年法要が、そして、今年は、関東大震災で非業の死を遂げ、両親も死去されてしまつたままに、永年回向もされなかつた王小姐や、北京で淋しく逝つた和成氏の名前も、父の墓にあらたに刻まれて、私にとっては三度目の

富士霊園詣でとなつたのである。

昭和十年六月、上海市政府で初めて王長春先生にお目にかかつてから、その因縁をもつて当時第一高等学校特設予科に在学中の知成君を知り、ついで勝之君を知り、また私の昭和十四年四月以後の上海在動中は、親がわりとしてとくに深い庇護を得、戦後はその長春先生の御遺骨を十数年にわたつておまもりしてきたなどの、次から次へとの推移、まさに「人間万事塞翁が馬」のような、移り変りのはげしさを、しみじみと思ひつかへると、やはり因縁の深さということがつくづくと考えさせられるのである。私はこの短い四十年の間に、戦争以前の中華民國、戦争中の中国、そして新しい中華人民共和國の三つの大きな時代の変革を、身をもつて体験することができた。そして「ものみな因縁によつて仮りに生ずる」という仏法の真義を、つぶさに王一家と私のかかわりありということからも、きびしく知らされたのである。

王長春先生と私との出会いは、まさに塚本善隆先生の推挽によつて、林彦明上人の抱持ちとして、中国旅行に伴したことから初まるのである。林彦明上人も上海では長春氏の配慮によつて日華仏教研究会の活動を研究さ

れたのである。七月四日、富士霊園への王長春家のお墓参りに先んじて、沼津に乗運寺を訪ずれたのも、実はこのような因縁からであった。

今日のような激動の世の中に、物の真実をみきわめることは甚だ困難でもある。中国では、かつての中国の歴代の帝王の教師であった孔子さまが、今日では保守反動の元凶として、あからさまに誹謗されていることは周知のところである。日本仏教の祖国としての中国仏教も、社会主義から共産主義への真摯な政治が行なわれている中国では、旧思想を破壊して新思想をうちたて、旧制度を破壊して新制度をうちたてようとする「破旧立新」の立場や、宗教をアヘンとする党是からは、もはや再起は全く不可能であると思われる。単に統戦工作の立場から、数箇の寺院が観光ルートの中にのこされているが、中国の民衆にとっては、たんなる文化遺産の域を出ないことはいうまでもない。民衆にとって宗教は、もはやまったくその存在は忘却の彼方にある。なぜなら、まじめな共産党員は無神論者であり、宗教を信ずることはないからである。今の国家に忠実なものにとっては、宗教は全く無関係の存在であるからである。

林彦明上人の提唱された日華仏教親善交流は、もちろん日本人や中国人の双方に真摯な仏教信仰の発露があり、共通の仏教精神が脈々と生き通っていたのである。しかし、今日の時点で、日本仏教の母胎であった中国の仏教祖師たちの遺跡を巡拝したいのは当然のことながら、共産主義支配下の中国に仏教が行なわれていない現実を十分に認識しなければならないのは、もとよりのことである。今日の中国では、宗教を信ぜず、共産党の指導のもとにひたすら国土建設に献身するのが愛国者であり、個人の宗教信仰に生きようなどするものは、まさに修正主義者の一味として憎悪をもって批判され追放されるのである。統戦工作の一環として中国仏教協会も組織されているが、国内的にはまったく活動していないのである。主体性を失なわず、大局をよく認識して対応する処置を誤らないこと、実はこれこそが、王長春先生が好んだ「人間万事塞翁が馬」の真義である。こうして私は、まず自らを正し励まして、仏教者としての信念、行動をさらに強めてゆくことこそ、今日に生きるものの真実であるとの決意を、「人間万事塞翁が馬」と、筆太く刻みこまれた王長春先生の墓前にあらたにしたのである。

△お盆によせて▽

北辺のお盆



須藤隆仙

(函館市称名寺住職
函館市文化財調査委員)

「けふは盂蘭盆なるに、幸ひ文化度官より建られし禅宗五山派の景雲山国泰寺という梵刹ありて、夷境三寺なるに、はからずもここに泊りありたるも、仏家に所謂因縁なるものならんと、同行申合てすこしの回向料を遣しめて、拜仏を頼めり」

安政年間に幕吏に付して北海道(当地エゾ)を調査した成石修という人の手記の一節であります。

江戸後期の北方は、ロシアその他の外国船の出没によって緊迫しておりました。松前藩だけにエゾ地をまかせておいてもだめである、という声が、江戸市中にも高まり、

エゾの浦に　うち出て見ればうろたえの

武士のたわけの　なれば知れつつ
この頃は寄るとさわるとエゾの沙汰

知るも知らぬも　大方の説

などという狂歌まで現われたので、幕府は驚いてエゾ地を松前藩から取り上げて直轄したのです。沿岸の防備には遠く宗谷の方まで兵を派遣し、太平洋岸三か所に官寺を建てて、派遣兵士の精神的抛り所とし、宗門改めやアイヌ教化の拠点としたのでした。

その三寺の一つがここに出てくる厚岸^{あきせ}という所の国泰寺ですが、調査隊の一行はたまたまお盆にここに泊り、回向料を届けてみ仏の供養をしたのでした。厚岸とは銅路を少し北上した所です。寺は文化年間に建てられたの

ですが、「けふは盂蘭盆なるに、幸ひ文化度官より建られし……」とあって、辺地で迎えたお盆に、思いがけなくお寺があつたことを、心から喜んでゐるさまがよく解ります。

○

現在日本の約五分一を有する広土の北海道は、そこに住んでいる人達もさまざまで、東北人あり、北陸人あり、愛知、滋賀、さらに九州人まで、本州、四国、九州各地の人達が移住して、それぞれの国の風習をそのまま伝えてゐる所が多いのです。

かえつて故郷のほうに現代風になつてしまつたのに、北海道に旧習が残されてゐるという面白い現象さえあるのです。

ですから、北海道のお盆風景は雑多であつて、民俗学的アプローチで、これが北海道型と決めるには困難な実情であります。

時期も、函館は七月で、他は八月のところが多く、また小部ですが旧暦でやるところも若干あるのです。

七日になると七日盆と称して、お墓の掃除に墓所へ行く家があります。そして気の早い家ではこのときお寺か

ら経木塔婆（水塔婆とか水ボトケとかいう）を頂いてきて、精霊棚をかざるところさへあるのです。慶応二年の小樽地方のある記録に「七月七夕にあられ法界致候事」（『高島運上家日記』）とあります。「あられ」というのは、ナスやキュウリを細くきざんで、それに洗米を混ぜたもので、本州方面では「水の実」とか「水の子」などと称しているあれですが、これがもう七日に供養されていたのであります。

勿論これは極く限られたところでありまして、大部分は十三日に精霊棚を設けるのは本州方面と同じであり、墓参も十三日に行います。経木塔婆も十三日にお寺から頂いてきてまつります。

安政年間に津軽の文人がエゾ地へ来て見聞を記録した『松前記行』という書に、函館地方のお盆の様子を、次のように記しております。

「七月魂祭に灯籠のみにて樺火焚す。墓処に至て法界するに、荷葉かふを用ひずして葡萄ぶどうの葉を用ゆ。是をカイバカイバと号て農家より市に売出すなり。又碑前に供ふるものみな赤飯なれば、近くに住む狄等十三日頃幾人も来りて、此強飯をとりおさめ、乾飯に為して持行となり」

最近はずいぶん變つてきて、供物などもお菓子・果物程度になりましたが、それでも右の記録にあるような風は大部のこつております。迎え火・送り火はあまりたきません。葡萄の葉に供え物をのせる風は今もあり、これは荷葉蓮の葉がないから、その代用です。津軽地方では南瓜や桐の葉まで供え、同地方の人はここでもそれをやります。葉の上には赤飯やお煮しめ、なます、サツマイモ、トウキビ、トマト、味ウリ、それに盆菓子と称する蓮華様のらくがん等を供えます。

そして前に出てきた「あられ」をバラバラとまいて、ご供養いたします。

○

ところで、このようにお墓に供養することを、「ホガイする」とか「ホガイに行く」などといっております。前掲書にも「法界致候」とか「墓処に至て法界するに」とあるとおりです。

これについて民俗学の先生たちは、行器（はかい）（食物を入れてあるく器物）からきたもので、元来は神霊を入れて持ち歩くものであった、というような説明をしておられます。

しかし私はこれに「法界」の字を当てているところに

注意したのであります。「法界する」といったような言葉の使い方からすれば、法界は「法界に供養する」という意味があつたと思われるのです。法界供養がそのまま法界になつたと思うのです。またその法界には、淨瑠璃の文句に「法界の男じゃと思えば済むと恨みながら」などとおるように、「法界無縁」、つまり無縁仏の意味があつたとも考えられるのであります。

大体がお盆の行事というものを見ておりますと、亡き親族のご供養もさることながら、無縁仏に対する供養が中心になつていと思われるのであります。遠いご先祖の中には、当然すでに忘れ去られて無縁になつておられる仏様も多いことです。これらの無縁様（筆者の母等は無縁仏を無縁様と呼んだ）に供養するということが盆行事の中心のようであります。お施餓鬼はもつともよくそれが現われていて、有縁無縁三界万靈にご供養するわけであります。（そういった意味では、最近ウラボンの語源をインドのウッルンバナ＝救済に求める説の出たことに注意したい）

○

江戸中期に、江戸文学者の一人であつた平秩東作は、

天明年間にエゾ地へ来ておりますが、松前地方のお盆を次のように記しております。

「聖霊祭は武家・町人ともに七月十三日の夕、先祖の墓ある所にまうで、爆籠をとぼし、霊膳を供へ祭る。膳部も丁寧なり。領主も御菩提所へ参詣し、自ら礼供をそなへ給ふといふ。町人・百姓といへども皆麻上下を著し、礼拝嚴重なり。さて家にむかへ戻りて十四日・十五日座敷に座を設け祭ること余国の如し。十六日また菩提所へおくりゆく。その間その墓所に灯籠・香火など絶ることなし。すべて此地にては神社・仏閣へかりに参詣するにも、上下を著せざればまうでぬ事に心得たり。辺土なれども古風のこりて殊勝の風儀なり」今はこんなに丁寧にはしなくなったが、それでも、勿論十六日の送り盆の風もあって、十六日の朝には精霊棚をかたづけ、供物・供花・ローソク線香などを水塔婆と一緒にして、川や海に流し、あるいは寺にもっていつて焼いてもらうのであります。(川や海へ流すことは汚染の關係で最近禁止されている)

また精霊棚について少し記しておきますと、これは丁寧な家では仏壇のほかに特別にこれを用意している家も

あるのですが、多くは仏壇をそのまま精霊棚風にお飾りするのです。墓所に用いたような葡萄の葉、または葦の葉を敷き、その上に、赤飯など墓所に供えたと同じような物をお供えします。本州方面でナワを張ってさげる乾柿や茄子などは、せんべい(煎餅)で上手に作ったものが売っており、それをさげます。また前記の盆菓子というものも必ずお供えするのであって、これは蓮華を形どった平たいらくがん(落雁)を何枚か重ねて、赤、青など彩色した美しいものです。

盆踊りも盛んで、「一国皆狂の如し」と記した幕末の書があります。しかし最近はこちらもだんだんスマートに変容されてきました。ただ私のいる函館では、八月初旬に開港を記念しての港祭りの行事あり、早くからその港祭りの踊りがイコール盆踊りといったふうですなかなかにぎやかです。

民俗学者はお盆はボニーといって仏教以前からあったともいますが、先霊をまつる人情に、仏教が一層信仰的意義を裏打ちしてくれた行事といえるのではないでしようか。



児童文学における子供たちの心

高橋良和

(作家)

雑誌『浄土』の編集室から珍しい注文つきの原稿を依頼された。というのがこの原稿を書く端緒となったのである。

凡そ宗門関係の出版物に年間何十回の執筆をしているが、児童文学についての原稿の執筆を求められたのははじめてである。児童文学の世界に四十年間も息をしているのであるから戸惑ったわけではない。他の出版物には

いつも書いているのが、『浄土』誌という法然上人讃仰会発行の雑誌であるから、ちよつと首をかしげただけのことである。

「児童文学における子供たちの心」というのがテーマである。大体においてこの設定がアンバランスである。ここでも児童文学の世界が理解されていないことに気づくのである。

然し約束したことであるから、この設定について述べてみることにする。

児童文学というのは子供のための文学である。もっと具体的にいうと、「大人が子供のために、読ませることを強く意識して創作した文書である」ということである。子供を読者の対象として創作された文学である。

これは洋の東西を問わず、アメリカの「子供と児童文学」という教科書のなかに、

今日の世界の文学には、子供のための文学と明示された分野がある。この分野の文学は、歴史の中から、大人の本や、その一部から、古今東西の文学作品から、成長の各段階の子供たちの、興味と成長にかなう素材を、なだれの如くに、自らあつめて大きくなった文学といえる。

とあるから、自ら児童文学とはなんであるかの意義は理解していただけると思う。

ある人は言う。

児童文学は子供をのばすための教育である。
児童文学は子供を正しく育てるための文学である。

といった定義づけをする人がいる。

文学の世界にはそのような定義づけはおかしいのである。

作家が児童文学の創作にあたるときに、この作品を通して子供を正しく育てよう、教育してやろう、などと考へて創作することは文学としての邪道であるし、そんな打算的なものが児童文学であってはならないと思う。

子供のために役に立つ文学である。そんな考えでは困るのであって、坪田譲治は「新修児童文学論」のなかで、

童話作家としてなにを目的としているかを問われたとき、私はまず、

「ほんとうに子供を喜ばせてやりたい。」

と答えている。

その喜ばせる技術というのか、方法というのか、それが作家の研究と良識のなかにふくまれているものなの

である。それを文学を通して子供中心に訴えるということである。美しいものを通して正しく生きる力を与える、これは児童文学の底辺として大切なことである。

その点になってくると、仏教のおしえとよく似ている点もあると考える人もいるだろうが、それであってもよいが、その美しいものが、仏教的なものであったり、正しく生きる力というものが、そのまま宗教的な正義感であっては児童文学真実性が崩れてくる。

自分の心のよろこびのために子供の本を書くのであると「宝島」を書いたスチーブンソンは言っているが、その動機が作品を生み出しているのであるから、自分の心のなかに芽生えた作家の衝動が作品となってあらわれたものなのである。

児童文学は明るさと、たのしさをもったものである、という見解はいつの時代でも通じると思うが、然し時代の変遷のなかには児童観の変遷、社会の変化などから、児童文化の世界にも大きな移り変りがあったことは事実である。

暗い世相のなかから、明るさをあたえようとしたときもあったし、明るい世相から、更に明るいものへの憧れ

をあたえる時代もあった。

更に明治と大正、大正から昭和へ、昭和も戦後となつてくると、子供の空想の世界も大きな変化をもつてきている。

然しそのなかにあっても児童文学は真実なるものへの追求をつづけなければならなかったのであって、その作品が真実の追求である限り、いつの時代になっても生き生きとした子供の心をとらえる文学としての存在価値が大きいのである。

その真実なるもの、それはいかなる時代でも変わらないものである。作家はそれを魂のうちにもちつづけながら、その創作の技術を駆使して、児童のための作品を生み出すことに努力すべきである。

こうした作品を耳にする子供たちが、すぐさま作家と同じ感動に入ることが出来るのかどうか、また必ず同じ感動に入らなければならないのか、その点でもひとつふれておきたい。それを読む子供はその作家の感動から子供としての次の世界に進む自覚というか、判断力というか、それとも自己確認というか、それがあれば、その作品の価値は果たされているとみたい。

子供の心にある糧（かて）をあたえようとする児童文学が過去において非常に多かった。それは必ずしも悪いとは言わないが、それを意義づけたり、価値づけたりするために宗教や、教育的な形態を用いることになる、児童文学の本質から離れてくるといえる。

児童文学のねらいといったものは結果的にみると、仏教のおしえのなかの世界と通じていることはたしかであるが、そうだからといってそのおしえをそのままに表現しても、児童文学とは言えないのではないだろうか。

というのは児童または大人と子供との間に浮かび出てくるものであって、教師がおしえ、僧侶が道を説いて、生徒や、信者の心に湧き起った世界ではないからである。

児童文学で大切なことは児童の創造力の開発である。その創造力ということは作家が描いた世界を読者である児童が参加することによって、はじめて効果が生じてくるのである。

その点で信仏の世界は一つのおしえを、それも完全な、歴史と、体験を通してまとめあげられたものをあたえることによって、それを聞くもの、信仰するものの心に花を咲かせることであって、仏教のおしえを聞くもの

は一にも二にも、その生活の歩みはきまっていることになる。

それに対して児童文学は読者が自由に創造して、自由な世界をつくり出していくところがとても開放的であり、進歩的であるともいえるだろう。

そうだからといって児童文学は仏教の世界を否定しているものではない。仏教と名のつくジャンルのなかでの文学ではないのであって、仏教も、思想も、科学も、すべてが児童文学のなかに溶け込んでいて、作家がそれを自由に凝結させて、新しい世界のもとに児童の創造力、そして空想の世界への方向づけするものである。

子供の心を育てることはねがうが、美を感じとる世界を求め、あらゆる芸術、そして宗教に対しても感動をうけることが出来る素質をつくることがその目標である。

芸術というのは作家が心に感じたことを外に出すことである。

もう一つ言い換えると、魂の爆発であり、凝結であるともいえる。

それをうけた子供たちが、新しい自己をつくるために創造し、行動していく、そこに児童文学が子供の心を育

てるといふ意味もある。

テレビを媒体とする世界がひろがって、想像力を奪うことが日増しに増えてきているとき、文学の世界によって、その欠点を補足して、読書する世界をあたえることにより、テレビで視聴した世界が整理され、そして子供の心にはっきり印象化する。

そのことでも児童文学に子供の心をつくる上に必要で



哲学への道

あり、読書指導という分野が大きな意味をもつことになるといえる。

テレビにはテレビの意味があるか、児童文学はそのテレビ時代のなかにあって、一つ一つの文学を通して、ある流れのなかにあるもの、なから動かない世界を知らしめることも、子供の心を育てる上には大きな役割があるといえるだろう。

とがわ
戸川 霊俊
れい しゅん

(大阪工業大学教授
京都・黒谷西住院住職)

▽
昨夏八月の末、招かれて久恋の地、広島県備北の三次

を訪れる機会に恵まれる。途次の僅かの時を割いて、倉田百三文学碑を、彼の母校三次高校の校庭に見、更に車を駆って、故郷、庄原に、すっかり変容して彼の生家

と、彼が眠る奥津城を展墓して感慨しばしであった。

想えば、私たちの先輩の者が、哲学的な思索に憧れに似た感情を抱く頃、その時代のものとして、まづ心ひかれる最初は、倉田百三の『出家とその弟子』なり或いは『愛と認識との出発』あたりではなかったであろうか。

……「哲学者は淋しい甲虫である」デニームス博士は、こう仰言った……に始まる彼の『愛と認識との出発』とを感激に胸ふるわせながら、幾度読み返へし読みふけたことであらう。

一 高生倉田が、深刻な自己の内部分裂に苦しみ喘ぎながら、ふと本屋に立寄って目を引きつけられ感動させられた西田茂多郎の『善の研究』、特にその中の「純粹経験」を感激こめて述べるくだりは、年若い私にとっては驚ろくばかりの魅力であった。

私に『愛と認識との出発』を奨め、さらに『善の研究』へと少年の目を向けさせ、思索することへの眼を開かせてくれたのは、中学の国語の教師であった。

勿論、これから受験準備期に入ろうとする中学生の私に、後年西田哲学で呼ばれる西田幾多郎の徹底沈潜の思

索が生んだ日本最初の独創的な哲学論究なぞわからう管がない。難解とすら感想をもつのもおこがましい。ただ、時折、国語の教科書を伏せて倉田と西田との出会い、そして『善の研究』の生み出された風土、その人物なぞを語ってくれる国語の教師の言葉に、おぼろげながら哲学または哲学することの意味がわかりそめたような気がする。

その頃は、桑木巖翼が東京へ去り、そのあとを西田幾多郎が『善の研究』を携へて金沢から京都に入った。所謂京都学派のその萌芽を見出そうとするときであったろう。それに感動する国語の教師のおのづからなる巧まぬ誘いであつたかも知れないが、その頃の私には、将来、学問としての志を哲学へという気持はさらさら無かった。むしろ、作家になりたい夢があつた。その年代の若者によくあるように、私もまた「アモーレ」という気だった名前の回覧雑誌に凝るのである。その幼い同人の中から、時経て同志社大学に英文学を講じる者も生れた。

「小説を書くなら三十を過ぎてからだよ」。私の作家志望の夢は微塵も達せられなかったけれども、人生経験の尊さをいましめられた国語の教師の言葉は今もなお、

私の耳朵に生々しい。

中学の日の国語の旧師、後年学士院恩賜賞の『日本能楽の研究』の大業績を残され、奈良学芸大学長として晩年を閉じられた能勢朝次先生とは、不逞の教へ子は再び相見ゆることはなかったのである。



真夏、学校の帰り途、若王子から銀閣寺のあたりへ東山の麓を流れる疏水の支流に、飛び込む。兩岸は殆んど自然に堀ったままなので、時には、陽に焼けた岩肌が泳ぎに冷え、疲れた身体の恰好の寝台の代りとなる。肌を乾しながら、白雲游々去来の夏の天空を仰いで友と語る。実にのんびりした屈託の無い風情であった。

この疏水に沿う道が、誰云うとなく語りつがれた「哲学の道」なのである。

浄土寺、鹿ヶ谷のあたり、人家が稀れに、かぼちゃ畑の続くその頃の東山の麓のこの道は、京大のあたりなら哲学しながら逍遙するに、まことふさわしい小径であった。更に移り住んだ西田幾多郎そしてその亜流の人達、時には寮歌を高歌放吟しつつ群れなして通る三高生たちの

この道が、ドイツ哲学の源流に学んだ人たちによって、ドイツ哲学の碩学らがおのがじしその逍遙思索の道をもつひそみに習って、このささやかな道を「哲学の道」と呼びたかったのも、むべなるかなと思われるのである。

しかし、最近、疏水が改修されたのを機会に、流れに沿う道には芝生が植えこまれたり、白砂が入れられたり、手の込んだ造園の作為が施されて、すっかり往年の「哲学の道」らしい自然さ、野趣は失われた。そして市の観光局の手で「哲学の道」なる石標が、固有名詞かのように、若王子に始まるこの道の入口に掲げられては、もう「哲学の道」の生命は失われたも同然の気がする。

「日曜や祝日の人出は、四条通り以上です」——道のほとりの人達は、ここにも、もたらされる自然らしさの破壊に眉をひそめる。

哲学の道は、独りが往くみち。人と一緒に往く道ではない。人と共なる道ではない。でも、この南禅寺、若王子からつづく道は、いまはアベックの繞舌の人の群れの通りに変わり果ててしまっている。



人間は純粹でなければならぬと思う。その人も、哲学の青年学究らしく、真に純粹無雜であつたのであらう。

時の内閣の文相を父とし、女流教育者を母とした彼は、その当時ある大学予科の哲学教授であつたが、純情を捧げた女性が、既婚者であることを知り、東海道線の鉄道の錆と自らを消した。

彼の労作としては、岩波の哲学論叢の中に、ただ一つカッシーラーの翻訳ものが残されてあると思う。

純粹なるが故に尊くもあり、また惜しくもある彼の自殺は、青春の疾風怒濤の時期にかかろうとする私にとつて異常な衝撃であつたことは否めない。

哲学とは？ 愛とは？ 人生とは？

若き学究を死に追いやったという世の眼に堪えられず市中を去つて隠れるように、まもなく彼女が移つた店が、ところも哲学の道のほとりの橋の袂にあつた。そのやさし気な、そして寂しげな横顔を垣間見ただけであるが、その店もいつしか閉じられた。いまま時ただけである道のあたりを散策しつつ、そのあたりに来る毎に、ふと足をとめるのである。

彼の同学の人たち——往年の京都学派を形成していつ

た人たちも、今は概ね、老境にあられ、まことに往時茫枯というしかない。

高校の課程は、殆んど外国語学校の様に外国語の授業に多くの時間が割かれた。

その中で、わずかに哲学や、論理学や心理学の時間が、良き息ぬきの時間ともなつた。

観山雪洲——禅僧のような名前であるが、れっきとした真宗西本願寺派の寺院の出である。

私が学問として、はじめて哲学の講義なるものを聴いたのは、この先生の哲学概論が最初であつた。最初の時間に教室に入つて驚ろいた。この人は日毎、私の寺の近くで見かける奇人らしい人。町を行くとき、わき目せず、面を真正面に向けて、肩をいからして悠然として歩を進める。湯屋に行く姿も、丸坊主頭に手拭を載せたままにこつともしない。凡そ浮土門の僧らしからぬ、むしろ禅僧の風情があつた。事実、西田博士の門下の間では「和尚」のニックネームで通つていたらしい。

講義は難解であつた。後年、私自身が教養課程の「哲学概論」を講じる参考に、学生の日聴いた観山教授のノートを引き出して、往年の観山教授も西田博士の「哲学概

論」やウイデルベントのそれらを参考して講義案作成に並々ならぬ苦勞されていることが、ありありと偲ばれた。第二外国語をフランス語に選んだ私にとって、ドイツ語が夥しく出てくる「哲学概論」の講義は、一そうの難解さを、かこたしめた。

教授の学問的生涯は終生講義一筋に生命をかけていられたようである。

講演をしない。ものを書かない。ひたすら哲学の学徒への提言にのみ精魂をこめられたその態度こそ、まことに哲学者にふさわしい態度とも云えよう。書くこと、評論することの多かった西田門下の中では、特異な存在であり、しかも西田哲学を行ずる立場の一人でもあろうか。後年、その講筵の末端に列した宗教哲学の波多野精一博士にもその感慨を窺うことができるのである。

▽

矢吹慶輝博士の宗教学の薰陶を受けて京都に帰った私は、矢吹先生の勧めもあって哲学の中でインド哲学史の本田義英教授を頼ることとなるのであるが、アーヌィク・インキの哲学よりもフィロソフィアの哲学への郷愁に駆ら

れて当然全盛の京都学派の講筵に心ひかれてゆくのである。

「哲学とは、こういうものだ、他の人と同じ様に器用に哲学を諸君に講じることが私には出来ない。ただ可能なのは諸君とともに哲学するだけである」。実に素晴らしい最初の言葉であった。

いつも和服姿で、講壇の上を左に右に往きつ戻りつ、思索し思索しながら、一言一句も、おろそかにせず屹々と講じてゆかれる田辺元博士に、私はこれこそ私がはじめて触れた真実の哲学の講義であると思えた。いつも、神楽岡から真如堂へ、そして裏道を黒谷の文殊堂から石段を降りて山門へと抜けられるのが田辺先生の日課の散歩である。鳥打帽を眼深かに、ステッキを携えたゲートルを思わせるような面影は今も目にうつる。

国が戦争前夜の態勢を執るその時に、「日本の教育を阻害するものは軍事教育である」と勇敢にも云い切られた天野貞祐。その時流に属せぬ「道理の感覚」と誠実にめた真摯そのもののカント哲学の講義の態度にも私の若き日の人生観に、世界観に魂の糧となったことは否まれまい。



南国旅情

《四》

|| スリランカ仏跡めぐり ||

みやばやしあきひこ
宮林昭彦

○
世界の味いとともにやはりホッとした心の安らぎを感じる。

南国の朝はすがすがしい。鳥のさえずりに目をさまし、ホテルの窓をあけると、緑の木立の向うに澄んだ湖に朝霞がほんのりと立ちこめている。湖に通ずる小路を裸足で歩いていた青年が、一人の老人とすれ違ったとき合掌して挨拶をしている姿が見えた。その光景は別に目新しいものではないかもしれないが、なにかしら心にほのぼのとしたものを覚えた。バンコックから飛行機で三時間十五分でセイロンに着くが、都会の喧噪に慣れてしまっている私たちは、静寂の世界に包まれてみると、別

ここボロナルワもむかしは栄えた町である。北インドからアーリア系のシンハリ族がセイロンに侵入してきて、原住民のヴェダ族を征服して国を建てたのが紀元前六世紀ごろである。前一世紀ごろから島の北部ヘインドからタミール族が侵入して国を建ててシンハラ族の王国と争うようになった。四世紀にアタラダプーラを首都として大規模な灌漑設備も整って米作が盛んとなり、仏教を中心に高度な文化が栄えた。また東西の海上貿易も盛んで多数のアラビア商人が往来していたらしい。

十二世紀という、日本でいえば源平時代にあたるが、この頃このポロナルワは都であって、輝しい文化を築きあげた。当時の王宮や寺院などの遺跡が、その面影をとどめている。遺跡は南北の二群に分れており、南群はほぼ方形のプランにしたがって。バラクラマ・パフー宮殿、トゥバラマ寺院、ヴァタ・ダーケ寺院、ラータ・マンダバヤ寺院などの遺構が並んでいる。また仏像や、彫刻のある石柱などの多くが、ほとんど完全な姿で保存されており、往時を偲ぶことができる。この東方のシヴァ神殿は、ポロナルワが主都になる以前、インドから侵入したチャーラ王朝の祖先が築いたもので、インドの石材ばかりでできており、最古のものであるといわれる。北都の方は、ランカティラカ・ヴィハーラという広大な僧院と、キリ・ヴェヘラという僧塔があたりを威圧している。その近くの自然岩に釈迦涅槃像、アーナンダ像、座像の釈迦尊像の三体の柔和な仏像を安置したガル・ヴィハーラがある。また仏教を外護したバラクラマ、バフー大王の肖像といわれる巨大な石像は、目をみはるものであった。

遺跡の周囲にはビルも建っていないければ、近代的な建

て物は一つも存在しない。町全体が遺跡であり、しかもそこに住んでいる人びとも裸足の生活である。かれらは文明のあかりのとどかない生活かもしれないが、しかし近代人の味えない自然とともに生きる人間の生き方がみられた。

○
時の流れに流され、沈みながら生きる現代人にとって、時を越えて、生きることは至難なことである。悠久の生命のなかに生きているという感じを、インドでもったことがある。インドを旅してみると、日常生活の現象面では、貧困、旱魃、食料危機、人口問題などいづれを一つとりあげても大きな問題であるが、その中で民衆は悠々と生きている。もちろん飢えに瀕して苦しんでいるすがたをよくみかけるが、しかし自然のなかに生きている、いわゆる人間のルートのようなものを感じた。それにくらべて近代的な国家といわれるような国々は、なるほど清潔であり、便利な暮らしをしているが、いかにも人間の作った生活、人工的な箱庭的な感じで、おおよそ大自然とともに生きているという実感はないが、インドにはそ



スリランカのこども

れがあるような気がした。スリランカにもその味がある。

ボロナルワの美しい樹木の茂る並木通りを過ぎて、平野地のデコボコ道をバスにゆられていく。二時間半ほどゆくと、眼前にライオンが座っているように平原に垂直に絶壁をなして立っている高さ一八〇メートルの岩山がみえる。シギリアである。四七三年から十八年間だけ栄えた町である。アヌラダプーラで父ダッセネ王を生き埋めにして殺し、王位を奪ったカシャバが、人も近寄れないこの岩山に城を構えて部下とともに住んでいたが、十八年後に異母弟に殺されたといわれる。鉄の階段を登りつめた岩のくぼみに、その当時描かれたセミスードの乙女たちの壁画がある。シギリア・レディーといわれ、スリランカ美術の最高傑作の一つに数えられているもので、もとは五百体もあったといわれるが、一五〇〇年の風雨に消されてしまい、現在は二十三体だけしか残っていない。しかし清楚な顔立ちと豊かな姿、そのすばらしい色彩は歴史の経過を忘れさせるほど美しさが残っている。

帰りぎわに子供たちに追いかけられた。物売である

が、日本語で「安い安い」と言いながら壁画の絵はがきや地図、木の実のネックレスなどを売りつけようとしていた。その姿をみていると、旅行者がいろいろのチエを授け、言葉にしても良い言葉は覚え、悪い言葉をその意味もよく理解せず使われているようである。

○

コロンボの東北百キロあまりのところにキャンディ市がある。山間の静かな古都である。一八一五年までは、ここにセイロン王国の首都であったが、現在は緑に囲まれた田舎町の風情がある。澄んだ湖をはさんで白亜の仏歯寺がある。四世紀にインドからもたらされたと伝えられるお釈迦さまの歯が、銀、象牙、宝石などでまばゆいばかりに飾られた厨子の中に安置されていた。訪問したのは夕刻であったが、手に手に花をもち、色とりどりの衣装で参拝に来る人たちでにぎわい、ドラや太鼓の鳴りものの入りのにぎやかな参詣風景であった。あとで聞くと、礼拝の時を知らせるために若者たちが太鼓を打ちならすのだそうである。仏歯寺のあたりには、小さな博物館や、ヒンズー寺院、かつての王宮の謁見宮殿であった



シギリア・レディー

最高裁判所の建て物が目立った。この寺は半官半民というのだろうか、国の役人が寺務所に常在し管理運営をし、写経儀式は僧侶が執行するようである。スリランカのお祭りのよく紹介されるものに、ペラヘラ祭がある。このお祭はキャンディの名物であるが、七月か八月の満月を前にして、象や踊り手をまじえた行列が町を練り歩き、満月の夜には百頭の象が飾り立てて、仏歯を中心として僧侶も列を連ねて、月明かりとたいまつの中の

行進するのだそうである。私たちはその盛大な祭を観ることができなかったが、月明かりにはえる湖と仏歯寺の光景にみとれながらにぎわう祭を想像したのである。

スリランカの現在の首都はコロンボである。なかなか広い通りに近代的なビルが立ち並び、どちらかというとヨーロッパ風の美しい町である。緑の樹木と花に色どられた公園や邸宅も多い。ひとたび下町の市場の辺には、道ばたいっぱいに野菜、果物、魚などを並べて呼びこんでいる風景がみられる。人口が約六十五万人というから、それほど大きな町ではないが、しかし新生の意気があがっている感じのする町である。歴史的には、ポルトガル人が開いて、オランダ人とイギリス人が発展させた町であるが、そのせいか、仏教寺院や仏塔などの歴史的な建て物はない。ただし、現在はマハーボーディソサエティがなかなか盛んであり、さすが仏教国だけあって、その寺には政府の高官もよく訪れ参詣している。一般民衆にも仏教が浸透している感じであるが、必ずしも積極的に社会に働きかけをもち表面にあらわれてはいないが、心の拠りどころとして生きていることは事実である。

赤道に近いこの島は、いつも太陽がほぼ頭上に輝いて

いるわけであるが、気温も温度も高い。ライオンと人間の両方を先祖にもつという英雄シンハの子孫、シンハリ族をはじめ人種は多様である。村の生活も何百年もの間ほとんど変りないといっている。前に述べたように素朴な人間の生き方、原型が処々にみられる。都会の生活はどこでも同じようであるが、むしろ自然に対する考え方、生き方は、近代人はむしろ学ぶものが多くあるような気がする。

「浄土」教化トラクト

『ひがん会』

B 6判・表紙共八頁

定価一部二十円（二〇〇部以上 十八円）

送料実費

発行 法然上人鑽仰会



泣くから悲しい

浄土教の流れ

△△△

たけ なか しん じょう
竹 中 信 常

(大正大学教授・文庫)

— 〇 一 〇 —

ここで「浄土宗の念仏」をはっきりさせておこう。
浄土宗の「念仏」をはっきりさせることは、同時にまた

「浄土宗」をはっきりさせることになる。

「ナムアマミダブツ」と唱える念仏はほかの宗派でもやっている。天台宗の一派では「朝題目の夕念仏」などといって、題目と念仏とをかけもちでやっているが、いそがしいことである。

わきから聞いていると、誰が唱えても「ナムアマミダブツ」と聞えて少しもちがいが無いようだが、実はそうではないのである。浄土宗の念仏とほかの宗旨の念仏とで

は大変なちがいがあるのである。そのちがいは大きく分けて二つある。その一つは「本願称名の念仏」であるということ、他の一つは「三心具足の念仏」ということである。

「本願称名の念仏」というのは、阿弥陀仏が称名念仏を仏となる約束の中で一番大切な中心をなすものであるとされたということである。このことは二段構えで説明される。第一段は「念仏が一番大切だ」ということ、第二段は「念仏は称名である」ということである。

まづ第一段(念仏が一番大切だということ)。

法然上人は『選択本願念仏集』の中で、

「阿弥陀仏は、衆生が往生をとげるには念仏以外のいろいろな修行をしてはだめで、ただ念仏をするものだけを救いとることを、仏になる誓いとされたのである」

と述べておられる。

数ある仏道の修行の中で、ただ一つ「念仏」だけを本願の中を選び取られたのである。そのわけは同じく『選択集』の中に述べられているが、これらは浄土宗にとって一番大切なところなので、その全文を左に掲げてみる。

「おもんみればそれ、すみやかに生死をはなれんと欲せば、二種の勝法のなか、しばらく聖道門をさしおきて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正雑二行のなか、しばらくもろもろの雑行をなげうちて、選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲せば、正助二業のなか、なお助業をかたわらにして、選んで正定をもっぱらにすべし。正定の業とは、これ仏名を称するなり。名を称すれば、かならず生ずることを

得。仏の本願によるがゆえなり」

これをわたし流に表現する。

静かに深く思慮をめぐらしてみるのは、この世のわずらわしさをはなれ、生死の繫縛を脱するには聖道門と浄土門という二つのすぐれた教えのうち、聖道門（自分の力で努力精進して成仏しようとする教え）をさしおいて、浄土門（仏の本願力を信じて念仏にはげむ教え）を選んでこれに入るべきである。浄土門に入ろうとねがうならば、正行（浄土宗の三つのお経を誦誦する。經典に課かれてある仏菩薩及び極楽のありさまを心の中に描いてこれをよく観察する。阿弥陀一仏に礼拝する、阿弥陀仏の名号を称する。仏の徳をたたえて御供養する。以上五つの正しいおこない）と雑行（阿弥陀仏以外の仏に対しておこなう行為）の二つの修行法のうち、しばらく雑行をなげうって、正行を選び、これを修せよ。正行の修行をしようと思うものは、五とおりの修行の仕方の中、助業（念仏をとなえるための助けとなる行）をわきにおいて、正定の業を選んで、これを専修すべきである。正定の業というのはすなわち阿弥陀仏の名号となえることである。称名念仏すれば、必ず往生すること

とができる。なぜならそれは阿弥陀仏の本願だからである。

仏教全体を二つに分けて、阿弥陀仏のお力によって往生する浄土門を選び、往生するためのおこないとして、阿弥陀仏だけを相手とする正行を選び、五つの正行の中から、阿弥陀仏の名号をとなえる正定の業を選ぶのである。つまり、八万四千もある仏教の法門の中から、称名念仏だけを選んで、これをおこなえばよいのである。なぜなら、阿弥陀仏自身が「わが名を称するものは必ず極楽に救いにとってあげる」と約束されているからである。簡単に示すと、

仏教↓浄土門↓正行↓正定の業(称名念仏)

ということになる。浄土宗の念仏は三とおりのふりにかけて、慎重に選び出された宝石のように尊いものなのである。

— 〇一〇 —

第二段(念仏は称名であるということ)。

前号で、ただ仏を心の中で念ずる(一心に思う)だけよりは、それと同時に、仏の名を口に声に出して「呼び

かける」ことのほうが、わたしたち凡人にふさわしいということを書いておいた。心で思うより、体でおこなうほうがしやすいからである。また、体でおこなっていると、それが段々に心の中に伝わって、その気になるものなのである。これは心理学でもジェームス・ランゲ説といって、一つの学説になっているほどなのである。簡単にいうと、人は「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」という説で、たとえば幼い子が、はじめは「泣きまね」をしているうちに、本当に泣き出してしまふことがある。全部が全部そうだとはいえないが、人間の心にはそういった要素もあるのである。

こういった人間心理の微妙なところは鋭く見ぬいて、「念仏とは称名である」——いま一心で念ずるよりは、声に出してとなえるほうが平凡な人間にはやり易いのだとして、「念とは称のことだ」とされたのが善導大師なのである。善導大師は法然上人より五百年程前に中国大陸にお生れになった方で、支那浄土教をおとなえになった方である。善導大師がお書きになった『観経疏』という書物の中の一句を根拠として、法然上人が日本で浄土教をお開きになったことは、すでに何回か述べたと

おりで、有名なことである。この善導大師が「念することとは称することだ」とされたのである。それはやはり善導大師の書かれた『往生礼讃』の中に、阿弥陀仏の第十八願を解釈されて、

「もしわれ成仏せんに、十方の衆生わが名号を称し、下も十声に至るも、若し生ぜずんば正覺をとらじ」

というふうに、十念ということを「十声」と受けとられているのである。そのほか『般舟讃』にも、

「声々連住して十念を満ず」

とあり、また『観經疏玄義分』にも、

「この十声の中には十願十行ありて具足す。故に上代一形を尽し、下も十念に至るまで、仏願力を以て皆往生することを得」

などとあって、念仏ということは声を出して仏の名号を

となえることだと教えて下さっているのである。

こうした善導大師の教えのもとになっているのは、『観無量寿經』の終りの方に、

「声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するがゆえに、念々のなかにおいて八十億劫の生死の罪を除く」

という一文があつて、いふなればお釈迦様がすでに「念仏とは阿弥陀仏の名をとなえることである」とお説きになつていたのである。

このことを簡明連載に「念称は一」と決断されたのが法然上人であつた。法然上人のお言葉を集めた書物の中に、

「口にとなうるも名号、心にて念ずるも名号なれば、いずれも往生の業とはなるべし。ただし、仏の本願は、称名の願なるがゆえに、声をたててとなうべきなり」

と録されている。口でとなえることと心に念ずることとを一応切りはなしてみれば、そのいづれもが往生のためのおこないであることには間違いない。さらには心と口とが一致するのが理想である。しかしそれは仲々うまくゆかない。そこで、まづ口でとなえる。となえているうちに、それが心の底になづんできて、先ほど述べたジェームス・ランゲ説のように、やがては心の底から仏を念ずるようになる。つまり称と念とが一致する。文字どおり「念称是一」ということになる。

—〇〇〇—

浄土宗の念仏の第二の特徴は「三心具足の念仏」ということである。三心とは三とおりの心持ちのことである。つい先ほども述べたように、念仏の理想的なとなえ方は、口と心、称と念とが一致することである。称は「ナム・ミダブツ」ととなえればよいので、舌のよくまわらぬ幼児にもできることである。ところが念のほうになるとそう簡単に三とおりの心持ちになれるかどうか。それでも、

「浄土宗の人は、三心の様（内容）をよくよく心得て念仏すべきなり。三心のうち、ひとつも欠けなば往生はかなうまじきなり。三心具足しぬれば、往生は無下にやすくなるなり」（『和語灯録』）

とあって、

「念仏の行者はかならず三心を具足すべき」（『選択集』）

ということなのである。

世俗の言葉に「カラ念仏、カラ題目」というのがある。また、「馬の耳に念仏」ともいわれる。カラはカラッポのこと、つまり心の中がカラッポの念仏のことである。馬に念仏を聞かせても、人間の心ではないから通じない。いづれにしても、ただ口先だけでとなえても、それは何にもならないというわけである。心の中にチャンとしたものを持つていなければだめなのである。——何を持つのか。三心を持つのである。三心とは何か。——これは来月号のおたのしみにしておく。

■読者 声■

念仏の自力と他力について

谷村義三
たに むら よし ぞう

法然上人は『一枚起請文』に自分の説く念仏は他の念仏とこのように違うということを大慈悲を以って書かれておりますから、私達はその教えを有難く戴いて常に実践しております。

しかし宗祖が称名念仏を無数の経典からお選びになったことが書いてある『選択本願念仏集』の第八章に「念仏行者は必ず三心を具足すべきの文」と題し、そこに三心を選び出した経典は『観無量寿経』であるということも明かされております。この文から見ましても、念仏を称えながら生活を営む私達は、この三心を常に身につけ

るように心がけなければならないと思います。

即ち、『観無量寿経』に云く、『もし衆生あつてかの国に生ぜむと願う者は三種の心を発して、即便ち往生しなむ。何等をか三とす。一は至誠心、二は深心、三は廻向発願心なり。三心を具すれば、必ずかの国に生ず』と。

法然上人が私達に果せられたこの三つの教えは単なる思いつきではなく『観無量寿経』の経典から釈尊が修行者への実践をそのまま伝えたものでありますから、この三つの修行方法は釈尊の教えと全く同じであります。

この大切な修行方法がなぜ『一枚起請文』に書いてないのでしょうか。八百年前の事ですから推測を出ない点もありますが、『一枚起請文』は法然上人入寂の二日前に非常に疲れておいでの時にお書きになったもので『選択集』に書いてある為に重ねて書かなかったこと、更に毎日戦争の中の生活で誰もが明日の命が不明であった為念仏を称えることがやつとであったこと、つまり落付いて修行の要件を学ぶゆとりがなかったこと、又今から八百年前の人々にどの程度の読書力と理解力があつたかにつきまして、一応考慮してみる必要があると存じます。

然し現代は時代が移り、文字も皆読めます。平和でそ

の意味も正しく理解できる時であるだけに、今こそ浄土宗の諸先生方がお書きになった本を常にお読みになることが必要であると存じます。常に繰返し読むことによつて、永い間には計り知ることのできない程の深い大きい利益を得ることができまし、又他の宗派から私の方へ来た方がよいですと勧められましても、そのために心が動揺しなくなることは間違いありません。

何故そのようなことがはつきり申し上げられるかと申しますと、そこが法然上人が正しい釈尊の教えに随順しているためであります。

『選択集』の至誠心・深心・回向発願心の中の深心の説明してある所に「深心と言うは即ちこれ深信の心なり。

——中略——また深信とは、仰ぎ願はくは、一切の行者等、一心にただ仏語を信じて、身命を顧みず、決定して依り行じて、仏の捨てしめたもうをば即ち捨て、仏の行ぜしめたもうをば即ち行じ、仏の去らしめたもう処をば即ち去る。これを仏教に随順し仏意に随順すと名づけ、これを仏願に随順すと名づけ、これを真の仏弟子と名づく。」

右の引用文中、「仏語を信じて」は經典に書いてある教えの言葉を信じてその通りに行なうことで、その他の

捨てしめたもうとか、行ぜしめたもうとか、去らしめたもうとか、經典に捨てよ、行ぜよ、去れ、とあればそこにあるように実践すること、随順するとは經典に書いてあることをそのまま実践することなのであります。

よく「私はこう思う」と言つて説明する人もありますが、經典に書いてあることをこう思うという人は必ずと云つていい程、經典の真意を歪めております。私達は法然上人の純粹の仏教に縁あつて学ぶことができることは本當に幸福なことでありまして、『維摩經』や『金剛般若經』を読みますと、經典から仏が生まれると書いてありますが、浄土三部經も皆大乘經典ですから、やはりそれらの經典と同じであります。

法然上人の『選択本願念仏集』の第八章の三心は念仏行者の修行の最も重要な所でありまして、竹中信常先生著『選択集に聞く』に判り易く書いてありますので、その三心の解説だけを何回か繰返し読誦して身につけることをお互いに努力して実践しましょう。

世間ではよく自力・他力と申しまして、念仏修行を他力といい、他の仏道修行を、特に念仏と対象して法華經修行を自力と言つておりますが、これは經典の真意をよ

く理解なさらない方の区別で、仏道修行は皆自力のものとあります。それでは浄土宗念仏のどこが他力であり、どこが自力であるか考えてみましょう。

これもやはり竹中信常先生著『ものいう石』の「浄土への道」に判り易く書いてあります。これは昔支那の唐の時代の善導という坊さんの二河白道という譬え話ですが、話はある旅人が盗賊や野獣に追われて逃げて来た所、左右に火と水がうつ巻く河に出てしまい、中央にやっと渡れる細い橋があったが両側の火と水に恐れて渡る勇氣が出なかった時、河の向う岸からさわやかな声で「汝この声をたよりに進みきたれ。われ、汝を守るであろう」という声が高かったたのでその声を頼りに恐れずに向う岸に渡れたという話です。勿論向う岸の声は阿弥陀仏の救いの声ですが、私はこれが他力であると思います。又恐れながらやっと向う岸へ渡れたことが自力であると思いません。これは大切なことで、他の仏に導びかれるよりも自力で渡った方が勝れているように思われがちですが、浄土宗以外の經典を読みますと、例えば『法華經』にしても『維摩經』又は『金剛般若經』にしても皆勝れた事が書いてありますが、最後にこの中でどの道を歩むことが

自分に最も適しているか説かれている意味は判っていても自分の歩む道を選ぶことは殆んど不可能のように思われます。それ故にそれらの人々は、読んで理解した中で自ら適していると思われる道を歩んでいる為に皆バラバラの道を歩んでいるのではないかと思われまします。その点は浄土宗念仏行者は、阿弥陀仏に声をかけて戴きながら彼岸に行くことのできることは誠に幸福であるとして、不退転（修行の途中で曲って別の方へ行ったり、やめたりしないこと）でなければなりません。

私達は毎日何回となく南無阿弥陀仏と仏の名号を称えておりますが、いわゆる諸仏の中の一仏である阿弥陀仏は、どの位の格式ある仏であるかが『無量壽經』の下巻の初の方の下輩の説明の次の節にあります。「仏、阿難に告げたもう、『無量壽仏の威神、きわまりなし。十方世界の、無量・無辺・不可思議のもろもろの仏・如来にして、かれを称歎せざるものなし』と」（岩波文庫、『浄土三部經』六五頁）。

私共念仏修行者が、常に心を込めて称名する阿弥陀仏は、このように諸仏の中の最尊の仏であることを忘れないようにしましょう。



法数術語十二ヵ月（八月の巻）

たから
宝 田 正 道
だ まさ みち

八^{はち}
音^{おん}

八^{はち}
字^じ

「はっとうん」ともいう。仏が法を説くときに出す八種のすぐれた音声。すなわち、極好音（聞いた者をおのずから仏道に誘いこむ妙音）、柔輭音（おだやかでやさしい声）、和適音（周囲に調和する優雅な声）、尊慧音（聞いた者がおのずから仏知を体得できるような声）、不女音（威厳のある男性的な声）、不誤音（聞き違いや聞きもらしのない正見を伝える声）、深遠音（奥深い真理を悟らせるに足る声）、不竭音（たえず倦させることのない、はつきりした声）の八つ。

特に『涅槃經』聖行品に説く「諸行無常、是生滅法」（雪山偈）の文のうち、後の半偈の「生滅滅已、寂滅為樂」の八文字をさす。

八十種好^{はちじゅうめうごう}

八十種妙好、八十随形好ともいう。仏の身体にその特徴としてあがる八十種の福相。元来、三十二相の大きな

特徴に対して、それに付随する微細な点を数えたものらしく、「相好」という熟語は、ここから生れたといわれている。

八大地獄

八熱地獄ともいい、凄まじい熱気のために苦しめられる地獄のこと。すなわち、等活（刀や棒で骨肉を碎かれ、死ねばまた活かされて責苦が永遠に続けられるという地獄。殺生の罪をおかした者がおちる）、黒繩（熱く焼けただれた鉄の鎖でがんじがらめに縛られる）、衆合（紅く燃える嘴のあるワシについばまれたり、刀の葉をつけた木の林につれこまれたりして苦しむ。偷盜・邪淫の戒を破った者がおちる）、叫喚（熱湯のたぎる大釜で煮られたり、業火の燃える密室にとじこめられたりして責めさいなまれる）、大叫喚（この地獄の一日一夜は人間の寿命の八百年に当るとされ、ほとんど永遠にこの苦から逃れられない）、焦熱（炎に取巻かれた地獄）、大焦熱（酷熱の猛火に焼かれる）、無間（阿鼻ともいい、七重の鉄城の中に銅をとがして熱湯とし、罪人を焼きただれさす。五逆罪や誹謗正法の罪をおかした者がおちる）の八つ。いずれも熱気と猛

炎に包まれた凄惨な世界である。

八風

八法ともいう。人の心をあおりたてるところから、風に喩えて、人間の胸中に去来する利・衰・毀・譽・称・譏・苦・楽の八種の心の動きを示す。

八不淨物

八種の不淨な物で、比丘として蓄えたり行なったりしてはいけない、とされている品物や行為。すなわち、金・銀・奴・婢・牛羊・倉庫および販売・耕種などという。また、田園・種物・穀帛・僕・禽獸・錢宝・罽毼・象の八つをさす場合もある。

八菩薩

特に文殊師利・觀世音・大勢至・無尽意・宝壇華・藥王・藥上・勸勤ら八体の菩薩をいう。

八万四千の法門はちまんしせん ほうしよん

教えの数の多いことを、かりに「八万」という実数で示したものにすぎないが、仏の説かれた法門は、それほど多いという意味。仏弟子阿難は、八万二千の教えを仏陀から受け、二千の教えを修行の仲間から得た、といっているから、おそらくこの数字は、仏の教えの全体をさす場合にこうした逸話を基準として考えついたものかもしれない。なお、この法数は煩惱のすべてをさす場合にも使う。

八葉蓮華はちようれんげ

胎藏界曼荼羅の中央に位置する（中台八葉院）八葉の蓮華。そこには大日如来を中心として、周圍八方に八枚の蓮弁をおき、その一葉一葉に仏・菩薩を配して「八葉九尊」と称する。すなわち、中央に大日如来、四方八葉に宝生・開敷華王・無量寿・天鼓雷音の四仏と、普賢・文殊・観音・弥勒の四菩薩を安置する。

八戒齋はちかいさい

八斎戒とも八戒ともいう。在家信者をして出家の戒を一日一夜だけ守って善事を心がけさせる八つの生活規制、すなわち、在家の五戒（↓）のほか、衣・食・住の贅沢を禁ずる（粉飾をやめ、美食から遠のき、粗床に寝る）ことを守らせる。これは毎月六斎日（↓）を期して行わせるのが例である。

八寒地獄はつかんじごく

八熱地獄（↓）のそばにある、炎熱とは逆に寒冷ただらぬ地獄。罪人の責苦にあうのは八熱地獄に同じ。

八功德水はちくどくすい

八種のすぐれた効能や特色をもつ水で、極楽浄土の池（八功德池）にあるという。すなわち、その水は、甘・冷・輕・輕・清浄・不臭で、かつ飲時不損喉（のどを痛め

ず）・飲已不損腸（腹をこわさない）の味と性質をもっている。

八はつ宗しゅう

平安時代に広まった八宗派、すなわち天台・真言の二宗に、いわゆる南都六宗（俱舎・成実・律・法相・三論・華嚴）を加えたもの。

八はつ正しょう道どう

八つの正しい修行道。「八聖道」とも書き、いろいろの異名がある。古くは八種道、八種行諦道、八種道行などとも訳され、また、八正、八支正道、八真道、八正路、八正覺路などとも称する。釈尊の悟りの内容を、具体的八種の実踐徳目として示したもの、すなわち、正見（正しい見解）、正思惟（正しく四諦の道理を思考する）、正語（正しい言葉づかい）、正業（正しい行動）、正命（身・口・意の三業をつつし、正しい生活に徹する）、正精進（正しい仕事に励む）、正念（正しい想いに住する）、正定（正し

い禪定により迷いを去る）の八つ。

八はつ相さう

釈尊の生涯を八つの重要な転機に区分している。異説もあるが、一般には降兜室（兜率天から白象に乗って降りてくる前生の姿）、托胎（摩耶夫人の右脇から胎に宿る）、出胎（同じく右脇から生誕して七歩あゆみ、天上天下唯我独尊と宣言する）、出家（妻子を捨て、白馬にまたがって王城を脱け出す）、降魔（勤苦六年の苦行の末、菩提樹の下で悟りに達しようとして多くの悪魔の誘惑にあうがこれを克服する）、成道（三十五歳のとき、十二月八日を期してついに解脱しブッダとなる）、転法輪（鹿野苑で五比丘を初めて教化して以来、四十五年にわたり各地に法輪を転ずる）、入滅（クシナガラ城外の沙羅双樹の下で涅槃に入る。八十歳。二月十五日）の八相に分ける。このうち、成道が最も重要なところから、特に「八相成道」という言葉も生れた。

『浄土』読購読希望者を紹介下さい。

法然上人讃仰会

念佛ひじり三國志 (天)

— 法然とわぐろ人々 —

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

見た運慶の觀世音菩薩はなかった。快慶と並んだ仏像は、いづれも父康慶の作品であった。

なぜ運慶は制作に参加しなかったのであろうか。

二つの面から推理できる。

ライバル意識を燃やしていた運慶が、あえて快慶との競争を回避した事実は、力量の上で彼を凌駕する自信がなかった混迷を物語っていたかも知れない。写経に沈淪していなければならなかったのである。

もう一面の推理には、運慶の計算が基底をなしている。



一

運慶のことに今少し触れておく。

俟乗房重源が、その工房を訪れた寿永三年の年初め、じつは制作上で運慶が深く迷っていた時機と思われるフシがある。

この時機から六年ほどあと、興福寺の南円堂が完成した。文治四年の正月だった。

そこに快慶の弥勒菩薩は安置されたが、重源が工房で

後年、京都へ乗りこんで三条仏師を蹂躪しつくしたほどの運慶である。制作技術と併行して、父の康慶にはなかった政治力、外交性を身につけていたと思われる。

その処世から計算して、父や快慶の作風と同一視されることを恐れたのではあるまいか。とりわけ大スボンサーである藤原貴族は、新しがりやの異端を嫌った。

現に菩提所の復元ぶりを監察にきた九条兼実は、康慶の親世音菩薩を見て、

——桐毫になお不審あり、と指摘している。

康慶や快慶の作風、その宋朝様式が不満だったのである。

運慶がライバル快慶と正面切って対決するのは、さらに十五年後、東大寺の南大門で一对の金剛力士像を競作したことは、前で触れた。

運慶は前衛派の異端だけでは飽き足らず、この新様式を踏んまえた仏師界での正統となることを構想していたようである。

焼け残った東大寺の宿房で一夜を明かした重源は翌朝、奈良仏師のもう一つの別流、成朝を訪ねた。

前号のあらすじ

東大寺の復興と大仏の再建は、俊乗房重源の势力的な勸進行によって着々と進展していた。造仏長官の左少将藤原行隆も、重源によく協力した。寿永三年（一一八四）、源範頼、義経の軍勢は京都に入っていた。しかも、鎌倉にある頼朝の巧みな政略は、範頼、義経の軍司令官と朝廷との接近を禁止し、政治面はもっぱら代官の北条時政に委ねるといふ緻密な姿勢であった。こうした時代に、重源たちの南都復元事業もおのずから高度な政治的識見が要請されるのは当然であった。そんな折、明遍僧都はよき智恵袋であった。そして、ここにたとえば仏師たちの選定にも、旧勢力と親しかった奈良仏師派の正統や、京都派たる三条仏師にもまして、奈良派の傍系の位置にあった仏師康慶たちの活躍する場面も用意されていたのである。実に運慶は康慶の実子であり、快慶はその弟子であった。

成朝には、すべて興福寺の食堂を割り付てあった。興福寺から別当が付き添ってきたのだが、この僧は途中で寄り道することになった。所用を思い出したのである。

「よろしかったら同道願いしましょうか。いくらも手間ひまはおかけ致しませぬ」

「いや、ぶらりぶらりひとり参る」

重源はことわって、ひとり成朝邸へ先行することにした。

〈東大寺・南大門〉



寺院でも、工房でもない。いわゆる長者の豪邸といった感じである。

初対面だった。

重源はわざと名乗らなかった。東大寺の宿房にいる僧だ、とだけ告げた。取次の者は強く身分氏名を求めた。成朝先生は然るべき紹介がなければ、みだりに面会はなさらないと言うわけだ。

「貞光別当に言われてまいった」

「興福寺の貞光さまでございますか」

その名は鳴り響いていたとみえ、取次の者は奥へ引っこみ、じきに重源を邸内へ招じ入れた。

豪邸である。寝殿造の庭は、手入れがゆき届いていた。兵火をかぶった奈良の街の惨状など、どこ吹く風である。

書院に現れた成朝は、体軀堂々の男である。豪邸の主人にふさわしい。じろりと重源を見やる眼つきには、ある種の権威を感じさせた。

重源は面倒な挨拶抜きで仏像の話をはじめた。知識はかなりたくわえてあるらしく、淀みなく受け答える。ただしその態度は恐ろしく尊大だった。

「仕事場はどちらで？」

話の途中で重源は、訊いた。

「何の用がある？」

「見せて欲しいと思う」

「ひとかどの仏師はな、軽々しく工房を覗かせるわけにはまいらぬ」

横柄に拒絶する。

「興福寺食堂の復元にあたり、手前どもにも少々考えがあるので」

「食堂復元じゃと……あれは貞光別当などに云々される仕事ではない。すべて俊乗房重源上人のご指示を受けることになっておる」

馬鹿な男で、眼前にいろのがその俊乗房であることを知ろうともしない。

重源は吹き出したくなるのを、耐らえた。そんなところへ所用を足した貞光別当がはいってきた。

あらためて重源だと知った成朝仏師の約変ぶりは、これまた見事であった。

「どうも先刻来、ただ人ではないとお察していましたか……」

平身低頭して、追従の限りをつくす。まるで自主性のない男だった。

卑屈なゴマすり者だ。せいぜい成り上がり長者でも相手にして、仏像を売る器量しか持ち合せていないようである。

奈良仏師と言うが、使いものになるのは運慶工房の仏師たちだけだ。

と、この最初の訪問で重源は匙を投げた。

この見通しは、あくまでも正確であった。

成朝は文治元年（一一八五）の五月、一族をあげて鎌倉へ移住してしまった。巧みに源家頼朝に取り入ったのである。

誰を通じて取り入ったのか、それはわからない。久我中条の通親あたりでもあったろうか。

鎌倉で、成朝は頼朝の依頼を受けて勝長寿院を造立した。故義朝を供養したものである。

以後、鎌倉幕府の権力を背景に専横の振舞をする。いったん京都仏師明円に任された仕事を、横合いから強引に奪ったこともある。

鎌倉へ去る前、引受けていた興福寺の食堂復元は、や

りつ放しであった。工半ばで放棄した。仕事に自信を失ったかららしい。

そのくせ復元の恩賞には、ちゃっかり顔だった。無位の身分に法橋を与えられた。

こんな成朝を重用した源家頼朝の文化センスにも疑問がある。十三歳で都を去り、坂東暮らしの頼朝だった。奈良仏師と聞けば、質の良悪も選別できずに喰いついていったようだ。所詮は田舎將軍であった。

頼朝自身が「北夷」と呼んで侮蔑した奥州の藤原秀衡。彼の方が遙かに中央文化と交流し、その実質を把握していたと言える。

それはともあれ、この動乱期に東奔西走して、エネルギーに堂塔仏像の再建に努力した念仏ひじり、俊乗房重源の功績は見逃すことが出来ない。

断絶しそうになる文化の切面を、ひたむきに縫合したのであった。

都には源家の軍勢があふれた。

二

大津から攻めこんだ範頼と、宇治からの義経軍団である。軍規もきびしく、狼籍な振舞に及ぶ者はいなかった。

しかし都人たちは心を許さなかった。木曾義仲のイメージが余りにも劣悪だったからである。

今に牙をむき出すにちがいない。どうせ坂東の荒武者どもではないか。

この恐怖心は、すでに兵庫まで巻き返してきた平家の還都を待望する気分に変りつつあった。

民衆が、と言うよりもこの変心は貴族の間であってとりわけ強かった。

後白河法皇の側近はしきりと法皇を口説いた。

「範頼や義経の軍勢を、いつまでも都に駐留させておいてはなりません」

「平氏追討の院宣を発せられるべきであります」

「すでに平家は兵庫一ノ谷に堅城を築き、生田の森には大軍があふれております」

「しかも後詰めとして、四国屋島には強大な水軍も待機しているそうです」

そんな強大な平家軍に、なぜ源家の軍勢をさしむける

のか。まかり間違えば大敗するではないか。

と、後白河法皇は反問なさらない。

武士どもを相剋させ、互いに傷つかせるのがこの君主が常道として選んできたやり口なのである。

まかり間違つて平家が大勝し、源氏軍が関東へ遁走してくれば、それもまた快事、というわけだ。

平家が擁して西国へ連れ去つた安徳帝は、この国で帝位を象徴する三種の神器を保有しているのである。平家の巻返しを期待し、安徳帝の還都を願う貴族たちの心底には、やはりこの大義名分論がひそんでいたようである。

寿永三年の正月末。蒲冠者源範頼を正とし、九郎義経を副とした源家の大軍は西をさして都を発向した。見送る貴族たちの眼が、複雑に光っていたことは言うまでもない。

それぞれの利害を軸にして、感情を回転させているのである。しかし大半の者は、源家の敗北を願つた。

平家の還都実現ならば、そのあとの政治動向は見当がつく。暴圧者清盛入道が世を去つた平家である。残つた公達は、自分らと同じ体質の持主だったからである。

源家に完勝されたら、そのあとはどうなるのであらうか。鎌倉頼朝の政道は、どのようにこの京都をゆさぶり動かすことであらうか。

皆目見通しが立たないのである。

盲目の琵琶法師生仏は、この時点で平穩な毎日を送っていた。時雨沢の心阿弥陀仏と、東山吉水の法然禅室とを交互に訪れることを日課とした。

法然から説法を開き、時雨沢では六時礼讃の調声にいそしんだ。

その日――

正確に言えば寿永三年の二月十日のことだった。

生仏は、心阿弥陀仏の訪問を受けた。朝である。昨日その住居である時雨沢の庵室で一日を過ごしたばかりである。

「何か俄かなご用事でも……」

生仏は盲目の眼を向けた。

「うむ、出かけて欲しい場所がある。そこで旧知の人が待っている」

「旧知の人？」

「三位中将重衡どのだ」

「えっ、重衡どのが……中将は一ノ谷で合戦中では」

「わしらは世事にうとかったのだ。じつは」

と、心阿弥陀の説明によると、平家は一ノ谷で大敗したのである。堅固と信じた一ノ谷城が、背後の嶋越え（ひよどりごえ）から奇襲をかけた九郎義経の軍勢に潰滅した。散を乱して、沖に浮ぶ軍船へ逃亡した。

この戦いで、三位中将重衡は生捕りの屈辱を受けた。

数日前、凱旋してきた義経軍に引かれて重衡は都へ帰った。平通盛、忠度らの大将首も一緒だった。

首級は八条河原へさらされ、重衡は八条堀川堂に蟄居させられているという。

「しかし重衡どのがなぜ私如き盲人に」

「琵琶を聞きたいと申し出されたのだ」

「捕らわれの身で、そんなことが許されるのでしょうか」

「それがだな。法皇がお許しになったのだ」

まさしく因果はめぐるものである。

あの治承のころ、鹿ヶ谷の陰謀が露顕し、その席上で琵琶を弾いた生仏も六波羅へ囚われの身となった。今宵今生の名残りに、と琵琶の弾奏を願って許された。

深夜の庭上から流れる琵琶の音に魅かれたのが重衡夫妻だった。と彼らは生仏の助命に奔走したばかりか、釈放後の落着き先として、この引導寺境内に観音堂を造立してくれたのである。

その恩人三位中将重衡が、今は囚われの身となって、首を刳ねられるいまわの思い出に生仏の琵琶を願ひ出たと言うのである。

だが、琵琶の弾奏だけが目的であらうか。

心阿弥陀仏も以前は、大和入道親盛と名乗って法皇の側近にいた。自分も近習たる實時であった。

琵琶をとおして何やら政治の糸が身辺に伸びてくる感じである。

「お許しになった法皇さまは、何か私奴に……」

観音堂を立ち出たとき、生仏は声を落して訊いてみた。

「うむ、そこが重大な話じゃ」

「重大な話とおっしゃると」

「琵琶弾奏の合い間に、三位中将の意中を聞き出して欲しい」

「意中とは？」

まさしく重大な秘事であった。

法皇の意志は、屋島へ持ち去られた三種の神器の奪還にある。この奪還に、重衡の身柄を交換条件としよう、と言うのである。

「三位中将はな、現在の平家軍にあって比類なき勇將じゃ。墨俣合戦では木曾勢を破り、備中水島の戦いでは源行家の軍を蹴散らした。このたびの一ノ谷でも副將軍であつた」

いわば脆弱になった平家軍司令官のなかでは最右翼に置かれる若きホープというわけだ。屋島の平家軍は、重衡の帰還を、咽喉から手を出したいほど熱望しているにちがいない。

この熱望は、三種の神器返還という条件を受容するのではないか。

これが後白河法皇の「読み」であるという。

「ただしこの秘事が源家へ洩れてはならぬ。幸わい三位中将は音曲を限りなく愛している。しかもおぬしは盲者じゃ。身辺へ接近しても義経の手の者は警戒すまい。琵琶の合い間に、中将が屋島工作へ応ずる意志があるかどうかを聞き出して欲しいのじゃ」

なるほど大役であつた。

しかし生仏は、大きくうなずいた。
六波羅以来の恩義にむくゆる道は、これしかないであろう。

聞けば、重衡以上に自分を愛してくれた北ノ方は現在屋島にいるそうだ。愛する夫に再会できるとあれば、重衡夫人の喜びはいかばかりであろうか。

八条堀川堂の建物が招呼の間にのぞめる地点にまできた。

生仏は話題を戻して、訊いた。

「勇將の誉れ高い三位中将が、一ノ谷の合戦でなぜこともあろうに虜囚の恥かしめを受けたのでございますか」

「うむ。聞くところによると、中将は乳母子（めのとこ）の後藤盛長と須磨の浜辺にまで落ちてきたらしい。沖では軍船が待っていた。ところが追ってきた梶原勢の射た矢が、中将の乗馬に的中した。幼いころから契った盛長は、副將軍でもある中将を見捨てて、単騎海中へ遁走したということだ。中将は追手に囲こまれて、どうにもならなかったようじゃ」

連戦連勝だった勇將も須磨の浜を悲運の戦場に刻印しなければならなかったというのである。

髪も髭も伸びて、三位中将重衡の容貌には公達の美形はひとかけらも残っていなかった。まして失意の虜囚である。その声からも若さが消えていた。

盲目の生仏には、落魄の輪廓をたどるすべもなかったが、重衡の声に運命の転変を実感できた。

「再びおぬしの琵琶の音を聞こうとは思わなかったぞ」
「横笛がございましたら……」

と、生仏も涙ぐんだ。

あの六波羅屋敷では、自分の琵琶に重衡が横笛で合奏してくれ、閉ざされた運命を切りひらいていたのであった。

「そうだ。五常楽を合奏したのであったなあ」

若い公達は曲名までよく記憶していた。

「五常楽でございました」

「今では後生楽とあらためたいほどだ」

いったん琵琶をおいた生仏は、盲目のため鋭さを倍加している聴覚で、室内の気配をさぐった。警固の者が近

くにいないことを確認した。

「重衡さま。屋島のお味方は如何でございましたか」

「如何とは？」

「何と申しますか、その戦意でございます」

「戦意……」

場違いな盲人の発言に、重衡はいぶかしげな視線を生仏へあてた。

「戦意は旺盛かどうか、とお聞きしているのでございます」

「戦意なぞ全くない」

と言い切って、一例として自分を捨てて海中へ逃げた

乳母子後藤盛長の姿をつたえた恩も義理も忘れて、ただおのれ一身の安全を考えてばかりいる集団なのだ。

「では、法皇の調停に應じて来られるわけですね」

「法皇の調停じゃと……生仏。おぬしは琵琶を弾ずるためだけに参ったのではないな」

「重衡さま。私はご恩返しのためにも、あなたの身を今一度北ノ方のもとへお返し申上げたいのでございます」

そう告白したあと、心阿弥陀仏を通して持ち出された後白河法皇の対平家との和平条件をつたえたのである。

三位中将重衡の心音は、凜々しい響きをとまって生仏の胸を掻き鳴らしていった。

「かりにその調停が成就したとしても、わしの一身は助からない。それは覚悟の上だ。ただ平家の武士たちは、上下こぞって戦いに倦んでいる。彼らのために御神器の件を屋島へ申し送ってもよい」

北ノ方との再会なぞ絶望だというのである。

「なぜ重衡さまの一身は助からぬのでございましょうか」

「生仏。おぬしは出家した身であろうが」

「さようでございます」

「仏罰の重さを、知ってしようが」

「はい」

「わしは南都を焼いた男だぞ。この仏罰は、御神器を法皇へお返ししたくらいで償えるであろうか」

「いやいやあれば平相国がなしたことで、重衡さまはたまたま前線の司令官だったに過ぎません」

「そうはいかぬぞ。生仏。わしはな、須磨の浜で盛長に逃げられたとき、梶原勢に組み伏せられたとき、即座に感じた。この虜囚の恥辱こそ仏罰だったのだということ

をな」

「仏罰なぞございませぬ」

生仏はきっぱりと言いつつた。

「何だと、仏罰がないと」

「はい。阿弥陀さまはお恵みだけを与えて下さる方でございます。罰なぞは……」

「解せぬ話だな、生仏。もっとくわしく話せ。その阿弥陀仏の話を」

「私には出来ませぬ。これは東山吉水の法然さまからお聞き下さい」

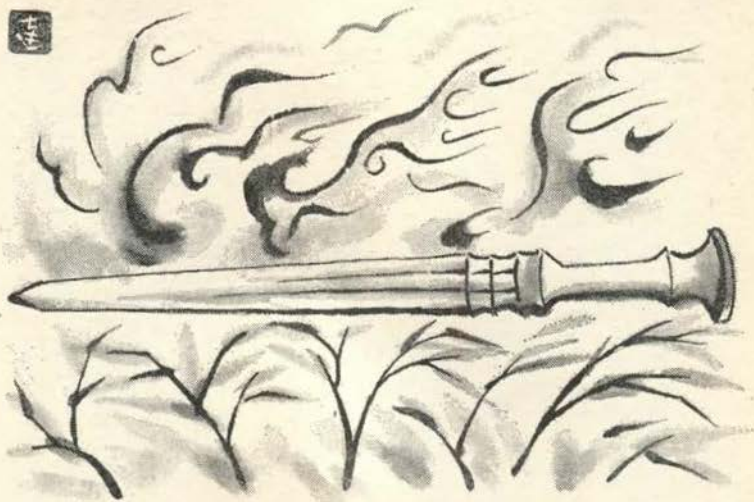
「おお、法然房か。お達者でいられるか。かねがね妻から聞いてはいたが」

「お達者で、毎日人々に有難いお話を聞かせて下さいます」

「わしも聞きたいものだが……そうか、そのために屋島へ書状を送る必要があるな」

生仏が帰ったあと、三位中将重衡は、屋島にいる平家の統領宗盛あてに、和議を緊急のこととする旨をしたためた。この書状は、警固の義経麾下の者に察知されぬように、極秘のうちに後白河法皇のもとへ選ばれたのであ

<三種の神器・草薙剣>



る。

一人聖体、北闕を出でて諸州に幸し、三種の神器、南海四国に埋もれて数年を経、尤も朝家の歎き、亡国の基なり。そもそもかの重衡の卿は、東大寺焼失の逆臣なり。すべからく頼朝の朝臣申し請くる旨に任せて、死罪に行わるべしといえども、独り親族に別れて、已に生捕りとなる。籠鳥雲を恋ふるを思ひ、遙かに千里の南海に浮び、帰鷹友を失ふ心、定めて九重の中途に通ぜんか。然れば即ち、三種の神器都へ帰し入れ奉らんに於ては、かの卿を寛宥せらるべきなり。といわば、院宣かくの如く。仍って執違件の如し。

寿永三年二月十四日

大膳大夫成忠が承り、謹上、前平大納言殿へ。

「平家物語」が紹介する屋島の平宗盛へあてた院宣である。三種の神器返還と三位中将重衡の助命とを交換条件としたものである。この院宣に、重衡自身の親書を添えて、屋島へ送られたものらしい。

これに対する宗盛の返書が、同じ月の二十三日に書かれ、京都へ届けられた。

和議の条件に異存はないが、と書いているが、文意の大半は後白河法皇への不信心で満ちている。源平がこうして争刻するのの原因は、政局の転移のたびごとに示した法皇の曖昧な態度だ、と強調する。朝令暮改の院宣を乱発してきたではないか。これを根本的に改めないかぎり、この和議条件は信じられぬという主旨のものであった。

重衡助命を餌に、またしても法皇は平家を欺むいて三種の神器奪還を企らんでいるのだらう、となじる。

成立し得る和議ではなかった。

そのことを、時雨沢の六時礼讃調声の席で、住蓮房は心阿弥陀仏と生仏に告げた。

住蓮房が、重衡の密書をどこまで知っていたかは疑問だが、彼は源家に近く、鎌倉の情報にはくわしかった。

「どうやら法皇の側近では三位中将を使って平家との和議を策しているようだ。」

と、念仏ひじり兩人がその当事者、少くとも重衡をかつぎ出した活動家であった事実を知らぬげに語るのであ

る。

「鎌倉どのからは、重衡逮捕のあの日、すべに法皇へ強い申入れがあったのだ」

「どんな申入れかな」

心阿弥陀仏は不安な表情で訊きかえした。

「屋島の平家追討は一刻も早く実行しなければならぬ。朝廷は九郎義経に命じて南海へ渡る院宣を発して欲しい、と言ってきたのだ」

「またしても法皇は……いや、あの小人どもは和議と追討の両様を秤にかけて源平をもてあそぶ気だな」

と、心阿弥陀仏も憤然となった。

小人どもとは、法皇の側近に侍る下級貴族どものことだ。心阿弥陀仏自身、彼らに讒言されて、院を出た嫌な思い出がある。

住蓮と心阿弥陀仏がかわす政治談義に、生仏は耳を傾けようとはしなかった。今彼はたった一つの行動だけを考えている。

それは何とかして恩人重衡卿を法然上人と逢わせることであつた。恩にむくゆる道は、この行動しかない、と信じこんでいた。

(つづく)

舞 見 お 中 暑

〒170 東京都豊島区西巢鴨三二〇—一 大正大学 電話(〇三)九一八—七三一—代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話(〇七五)四九一—二二四—代表	家政学園長 京都家政短期大学長 大橋 俊有	鎮西高等学校長 真和中・高等学校長 上田 祐規 熊本市九品寺三一—一一
埼玉工業大学 松川 文豪	東山学園長 藤原 弘道	焼津市小川三 光心寺住職 北山 良祐	青森市本町一—一—十二 正覚寺 楠美 知行
蓮勝寺住職 柴田 敏夫	だん王法林寺 信ヶ原 良文 京都・三条大橋東詰	光明寺住職 白幡 憲佑 横浜市南区庚台久保山	西住院 戸川 靈俊 京都市左京区黒谷町三〇

舞 見 お 中 暑

保元寺

里見達人

東京都台東区橋場一四七一

称名寺住職

須藤隆仙

〒040 函館市船見町一八一四
電話〇一三八二二二一五七八番

中島真哉

青山梅窓院

東京都港区南青山二二八三八

無量山伝通院

〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二二三六一

清岸寺

原口徳正

華陽院

堀田良謙

静岡市鷹匠二二四一八

近龍寺住職

松濤弘道

〒328 栃木市万町二二一四
電話(〇二八二)二二一〇八〇二

光運寺

飯田信弘

四日市市中部三十二

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 八月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十一年七月二十五日 印刷
昭和五十一年八月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒101 振替東京八一八二一八七番

舞 見 お 中 暑

岸 信 宏
京都市東山 知恩院

浄土宗宗務庁
浄土宗宗務支所

法主 大野 法道
大本山 増上寺

大本山 光明寺
法主 石井 真峯

大本山 清浄華院
法主 高 畠 寛 我

大本山 善光寺大本願
法主 一 条 智 光

法然上人御降誕地
廿五霊場第一番
誕生寺
岡山県久米郡久米南町里方
中国従貫道路大阪より二時間

西 福 寺
稲 岡 覚 順
川口市西川口三十二四

大正大学理事長
浄土宗議會議員
栗 本 俊 道
東京都文京区大塚五十二一〇
西 信 寺

鵜 飼 隆 玄

鎌倉大仏殿 高德院
佐 藤 密 雄

祐天寺
巖 谷 勝 雄